

22. Shepherd's Crook Deformity をきたした

線維性骨異形性症の治療経験

整形外科

小口泰司、早乙女絃一

目的：線維性骨異形性症（以下 FD）による大腿骨の shepherd's crook deformity に対し、腓骨骨移植術（以下 FG）と外反骨切り術（以下 VO）を行った 3 症例の成績について報告する。

【症例 1】39 歳男性、右股関節痛を主訴に初診となる。40 歳時に FG と VO を行った。術前(術後)の頸体角、脚長差は 95 度(135 度)、2cm(1cm)であった。7 年後の現在、股関節痛なく頸体角に変化はない。【症例 2】33 歳女性、左股関節痛を主訴に初診。同年に病巣搔爬と FG を行った。34 歳時に VO 施行、35 歳時に FG と VO を行った。初診時の頸体角は 60 度、2 回目(3 回目)の手術後の頸体角は 90 度(135 度)であった。14 年後の現在、杖なし歩行可能である。【症例 3】3 歳女性、跛行を主訴に初診。同年病巣搔爬術と骨移植術を施行。11 歳時に病巣の骨破壊が進行したために、病巣搔爬術と骨移植術を再施行した。14 歳時に内反変形の予防のために FG を施行した。18 歳時に内反変形を矯正する目的で VO を施行した。その後、内反変形がしだいに進行し、27 歳時に頸体角 90 度の内反変形に対して、FG と VO を再施行した。術後 2 年 5 ヶ月の現在、1 本杖歩行可で、内反変形の進行はない。

【考察】大腿骨に罹患し、shepherd's crook deformity を呈した FD に対しては保存的治療が優先されるが、高度の変形と痛みによる歩行困難に対しては手術療法が選択されている。現在よく行われている手術法はプレート、スクリューなどによる内固定を併用した VO である。しかし、転子部から骨頭にかけて、病変が存在した場合や骨端線閉鎖前の患者に対して金属による内固定が難しい場合がある。自験全例は転子部から、頸部にかけて病変が存在していたため腓骨骨移植術を施行した。FG だけでは、内反変形は予防できないが、FG と VO を同時に行うことにより良好な結果が得られた。

23. RSD における 3PBS の臨床的意義

放射線医学

山崎英玲奈、橋本禎介、千勝博子、澤田裕久、河野達夫、比企太郎、荒川浩明、岡田吉隆、桑島成子、齋木名執、藤岡睦久

目的：Reflex Sympathetic Dystrophy Syndrome(RSD)の病態を three phase bone scintigraphy (3PBS) を用いて検討した。

対象、方法：RSDに罹患した 61 症例を対象とし、^{99m}Tc-MDP 370MBq を急速静注し、その所見を stage 別に検討、解析した。

結果：RI 血管造影では hypervascularity が stage 1,2,3 では 13/20(65%), 1/10(10%), 1/5(20%) に認められた。早期像にて hyperemia は 31/34(91.2%), 13/18(72.2%), 5/8(62.5%) に、後期像にて hyperfixation は 32/35(91.4%), 17/18(94.4%), 5/8(62.5%) に認められた。Stage 1, 2 の 2 症例では hypovascularity と、病変部への集積低下像が認められ、治療に抵抗性で予後不良であった。3PBS は RSD の病態の把握や経過観察、治療の効果判定や予後予測などに有用であると思われた。